
私と先輩と、バスケットと恋。

由紀琳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私と先輩と、バスケット恋。

【Nコード】

N0709Z

【作者名】

由紀琳

【あらすじ】

館華亜緒たけはなあおは容姿端麗で大人しい性格のいい子。…というのは外面で、本当の性格は女の子らしくない性格の悪い子。そんな亜緒がある日一ノ瀬良いちのせりょうと出会い…

登場人物（前書き）

よろしく願います!!

登場人物

・館華 亜緒
たちばな あお

女 9月9日生 おとめ座 16歳 特技 猫かぶり 趣味 人間観察 身長165cm 体重48kg

普通より少し貧しい家庭。中学の時にいろいろあり、猫をかぶって大人しい性格で学校生活を送る。本当の性格はキツイ。趣味の人間観察をしながら、心の中では毒舌吐きまくり。でも優しい所もある。女子のくせに相当な面倒くさがりや。成績はまあまあいい方。だと自分で思ってるだけで、本当は5位以内に入るほど。

艶やかな黒髪で、胸の辺りまでの長さ。小顔で二重のパッチリした目。口は小さく、口角は少し下がり気味。化粧はしない。細身で足が長め。モデル体型に近い。「容姿端麗でいい子」と言われ、男女共からモテている。無自覚。素顔の時は自分のことを「うち」と呼ぶ。猫をかぶっている時は「私」。

・柏原 真
かしわばら まこと

男 10月5日生 てんびん座 16歳 特技 野球 趣味 読書 身長179cm 体重65kg

普通の家庭。中学時代は野球部だった。亜緒と同中出身のため、本当の性格を知っている。性格はサバサバしていて、何事もあまり気にしない。亜緒の性格が変わったのもあまり気にしていない。クラスには普通に馴染んでいる。成績は普通。

校則が結構自由で、髪は暗めの茶色、アシンメトリー。左分け。一重のくせに目が大きい。野球部だったこともあり、筋肉質で少しだけがっちりしている。特に好かれるワケでもなく、嫌われるワケでもない普通のヤツ。亜緒に何かと絡まれ、絡む。

・一ノ瀬良 いちのせ りょう

男 5月20日生 おうし座 17歳 特技 バスケ 趣味 ス
ポーツ観戦 身長185cm 体重64kg

普通より少し上の家庭。小学生の時からバスケットをやっていて、才能に溢れている。今もバスケット部に所属していて、次期部長と噂されている。リーダーシップがあり、爽やかな性格。気配りができ、ユーモアがあり、優しい、という良いヤツで、運動神経抜群というカンペキな人間なため、ものすごくモテる。モッテモテ。少し自覚しているが、特に気にするわけでもない。

明るめの茶髪で、右分け。シャープなあごのライン。二重で目が大きい。唇は薄い。手足が長く、体中に筋肉がついているが、細マツチヨ。あることをきっかけに、亜緒にまわりつく。

・山田蘭子 やまだ らんこ

女 16歳 特技 情報集め 趣味 妄想 身長153cm 体重45kg

良のことが大好きな追っかけ。束縛がものすごい。ミィハー。でも、良一筋。自分を可愛いと思っているナルシ。でも、それほど可愛くない。女扱いをあまりされない。

腰まである長い髪。良のマネで明るめの茶髪。少し丸顔。一重で目は小さめ。華奢だが少し重め。

登場人物（後書き）

感想などよかったら書いてもらえると嬉しいです）、（

いつもの生活（前書き）

前回のサブタイトル間違えました！

すいません（・　・　;A）アセアセ…

いつもの生活

たじろはなあお
館華亜緒。高校1年生、16歳。

家庭は結構複雑だと思う。少なくとも幸せではない。

貧乏だし、親は仲悪いし、お姉ちゃんは問題児だし。うちも中学の時少し問題児だったし。

友達はいない。正確には、いたけど自分からなくした。自分からね。うちなんかと関わってもいいことないと思ったからうちから縁を切った。「縁を切った」と言っても大したことはしていない。ただ、連絡取れなくしただけ。

学校ではうちの本当の性格を隠している。いわゆる、猫かぶり？みんなとは近すぎず、遠すぎずの距離で接してる。

まあ、こんな感じの生活。あ、そうそう。朝は結構早起き。なぜかって？

朝シャンするからだよ。今は冬に近いから、ものすごく寒い。そんな思いしてまで朝入る理由は…教えないよ。

今日も朝シャンして学校に行く準備をし、出発する。

「いつてきます。」

誰もいない家の中にボソツと呟き登校する。

親は共働きで、時々朝から二人共いないときがある。それが今日だ。まあ、そんなに関係ないけど。

「おはよー」

「あ、おはよう。」

「はよつ。」

「おはよう。」

教室に入ると、みんなが挨拶をしてくる。内心めんどくさいけど、猫かぶりモードONの今のうちが無視できるわけない。てか、思ったんだけど、「はよつ。」ってなんだし。「お」と「う」はどこいつたんだよ。「はよ」なんて言葉、日本語にないし。日本人なんだから日本語正しく使えよ。つかえないなら英語でも使え。「Good morning!」とか言ってるやいいじゃん!!
…おおっと、ちよつとツツコミ過ぎたかな?(笑)
そんなことを思っていると、あの日本語が正しく使えない日本人もどきがまた声を掛けて来た。

「やっぱり今日もかわういーね! 亜緒ちゃんは!」

「え。そんなことないよ。」

『かわういーね』だって。うざつ。うちソイツ嫌いなんだよね。かつこよくないし。チャライし。

「またまた」。そんなに謙虚になんなくていいんだよ?」

「そーそー。でもまた謙虚な所が可愛いよね」

「フフフ。みんなお世辞が上手いのね。」

ホント、お上手ね。…誰にでも言ってるんだろ、そんな言葉! ちよーウザインですけど。もう、どっか行ってくんないかな。そう思っていると、

「おはよ。」

とデカイ体したヤツが入って来た。…かしわはまこと柏原真だ。

「おはよう。」

と笑顔でうちが返すと、見逃してしまうくらい一瞬だけ、ニヤツと笑った。

…何が面白いのよ。ムカつく。

真はうちの横を通り過ぎ、みんなに挨拶をしてうちの後ろに座った。

「よお。猫かぶり亜緒ちゃん。」

真は前のめりになって小声で話して来た。

めっちゃムカつくー。でもまあ、小声で話してくれてるからまだいいけど。

「何のこと？」

うちは少し後ろを向いて知らないフリをして言った。

ホントは思いつきり叩きたいところだけど、ここはおさえて。

「そんなことする意味がわかんねえなあ。オレは。」

だから何のことだって言っただけじゃん。お前も外国人かつ。

答えるのもめんどくさい質問だったから、答えずに無視した。その代わり、色んな思いを込めた笑顔を返した。おもに怒り？（笑）

その後に先生が来て授業が始まった。

お昼。

うちはいつものように誰もいない空き教室でご飯を食べようとした。すると、ガラガラッとドアを開けて誰かが入って来た。

「よお。」

真だった。

真はなぜかわからないけど、一週間前ぐらいからここでうちと一緒にご飯を食べるようになった。

教室で絡んでくるのも一週間前ぐらいからだ。

「また？」

「いいじゃん。別に」

「ヤダ」

ちよつとぐらい一人になりたいもん。そして午前中あったことを思い出したりしたいし。

そんな思いを無視するように、

「まあまあ、食べようぜ？」

と言ってきた。

それに言い返そうとしたとき、

グウ~~~~~

と大きなお腹の音が鳴った。…間違いなくうちの音だ。

真は、声を出さないように口を閉じ、拳を作って口に当て、肩を小刻みに揺らしている。

こんな失態を真に見せるなんて…。なんてことだ。そう思うと、だ

んだんと頬が熱くなってきた。

うわぁ！顔まで赤くしちゃうなんて！…最悪だ。「○（ＴへＴ○）」
こんな絵文字が当てはまってしまう。

出来るなら時間を戻したい。そう思っている間にもまたお腹が鳴ってしまった。

「ハラ、めっちゃ空いてるみたいだから早く食おうぜ？」

ううゝ。めっちゃ悔しい！！いつか仕返ししてやる！覚悟してる、
真！！！！

そしてうちはご飯を、やけ食い状態で食べた。

これがうちのいつもの生活。

いつもの生活（後書き）

感想などよろしく願います!!

先輩との出会い（前書き）

ついに先輩と出会っちゃいます（＃＾・＾＃）

先輩との出会い

今日もいつもの様な生活だと思っていた。

つまんないな、なんて一瞬でも思った自分がいて、自己嫌悪してしまった。

自分からこの人生を選んだんだから、こんなこと思っちゃいけない。それに、真もいるから大丈夫か。またお昼一緒なのかな。

…って！また変なこと考えちゃった！ダメダメ。何やってんだ、うち。よし、今日もがんばるぞ！

そんなことを思いながら、学校へ行った。

学校に着いてからは、猫をかぶった。今日もあの日本人もどきが声を掛けてきて、「かわういーね！」って言うてきた。マジうざ。本当なら関わりたくない。でも、しょうがない。そう自分に言い聞かせるしかない。

お昼もまた真が来て、一緒にご飯を食べた。

今日は羽目を外すことはなかった。…よし！

心の中でガッツポーズをしたくらい嬉しかった。

放課後。

今日は日直の日だった。

日直は二人で、うちともう一人の人は日本人もどきの友達だった。面倒だな、と思ったけどこっちは人はそんなにうるさくなかった。むしろ、優しくていい人だと思ったくらいだった。

そして最後は日誌を先生に渡すだけになったので、あまり役に立てなかったお詫びとして、うちが渡しに行くことにした。

先生を探すと、職員室にいた。

コンコン、と扉をノックして「失礼します。」と言って入る。

先生の席まで行き、日誌を渡して帰ろうとすると、

「あ、館華。ちょっと頼まれてくんない？」

と言ってきた。

めんどくさー。なんでよりによってうちの？もっと違うヤツに頼めよ。

でもまあ、断る理由もないし今はいい子だからやるしかないか。

「なんででしょう？」

心のつぶやきとは大違いの言葉遣いで聞く。

さっさと終わらせて帰ろ。

「あのさ、体育館からサッカーボール取って来てくれない？一つだけ泥めっちゃ付いてるのあると思うから。」

そして、顔の前で両手のひらをくつつけて、「お願い」と付け足した。

嫌です、なんて言えないから、しょうがなく

「分かりました。持ってきます。」

と笑顔で答えた。

…分かるわけないだろ！そんなの自分でやれし。それがマネージャーに頼めばいいじゃん！！

マジ意味わかんない。あーム力つく。だから先生つて嫌い。

ウザイし生徒のことこき使うし、偉そうなフリするし。マジありえない！！！！

そんなことを心の中で、あくまでも心の中でつぶやきながら体育館へ向かった。

体育館に入ると人は一人もいなかった。

そういえば今日は体育館使う部は、全部休みだったな。なんでだったかな？

まあそんなことどうでもいいや。早く帰りたいし。

帰ったら何しようかな。パソコンでもやろうかな？それとも録画しておいたテレビでも見ようかな？

…ってそんなのは後で考えればいいか。

まずはサッカーボールだよ。倉庫かな？…

コロコロコロ、トン

…足に何かがぶつかって、それを確認すると…うわ。バスケットボールじゃん。懐かしー。

なんで懐かしかった？それはね、うちは昔バスケットをやっていたからさ！

…いきなりこの口調は変だった？んー分かった。やめるよ。しょう

がないなあ。

まあそれは置いて。さっき言った通り、うちは小学生から中学生までバスケットをやっていた。それも今は、勉強に集中したいからやっ
つてない。

でも一番の要因は……才能がないから。元々運動神経悪かったし、全然上手くなかったから、小・中学校とは違って高校はもっとキツ
イから、うちには無理だと思った。
てかそれ以上に、猫かぶった時の性格と全然違うから出来ないっし
よ（笑）

…でも、ちょっと気になる。中3の春から全然ボール触ってないし。
それに、足元に転がってきたヤツ拾わないで無視するなんて、ねえ。
と、最もらしい言い訳をつけてボールに少し触れた。

うわー。ちょー懐かしー。このザラザラした感触。独特の匂い。

なんかドリブルしたくなってきた。…誰もいないよね。

えーい、ドリブルしちゃえー！

そして立ち止まったまま、ドリブルをし始めた。

ハハハ、楽しくなってきた。ヤバイ！めっちゃ楽しー。走っちゃえ

！ワー！！ヤバーイ！

ホント楽しー。シュートもしちゃえ！

えい、と投げるとポンツと気持ちいい音が聞こえた。

おお。入ったあゝ。もう一回シュートしちゃえゝ。うわー、また入
った！ハハハハ…

ガラガラッ

「!？」

音がした方を勢い良く見ると、バスケ部の部室から扉を開けてうちを見ている人がいた。

理解するのには少し時間が掛かった。

…ん？人？人！？ヤバイ！！見られた！！どうしょ…

「どうしたの？何してんの？」

「え？」

どうしたのって…え？ちょっと、意味わかんないんですけど。

あ！ボーツとしてる場合じゃなかった！！

どうすつぺ。…そうだ！ここは、「逃げるが勝ち」だ！これしかない！一応なんか言つとこう。

「すみません！」

咄嗟に頭に浮かんだ言葉を口に出し、急いで倉庫へと向かった。

ボールボールボール…あつた！うわ汚つ。でもしょうがない。逃げる！

そしてうちは全力疾走した。

途中でさっきの人が「あ、あの！」と呼んだ。

…気がしたただけだね。そうそう。うち、決して無視なんかしてないよ？ほんとにしてないよ？

ただ、呼ばれたかどうか不確かだったからね、もし呼んでなかったらうち恥ずかしい人でしょ？

だから、振り向かなかったんだよ。そう。そうだよ？

…ハア、ハア、ハア…

息切れヤバー。やっぱり運動不足かな？

あ、そうだ。ボール先生に渡さないと。

そして手の中にあるボールを見て、やっぱり汚いなー、なんて思いながら先生に渡して帰路についた。

まず、頭を整理しよう。

さっきうちのことを見ていたのはあの人だけだったよね。

あの人、何て名前だったかな？

「そついえばあゝ、あのバスケ部の一ノ瀬良先輩いちのせりょうつてえゝ、ちょーカッコイイよねえゝ。」

…一ノ瀬良？一ノ瀬、バスケ部…！！

一ノ瀬良先輩だ！そうだ、一ノ瀬先輩！

顔は申し分ないくらい…いや、申し分なんて一切ない良い顔してた。ム力つくな。

…で、明日言いふらされてたらどうしよう？そんなことされたら、今までのうちの努力が無駄に…！

それだけはヤダ！！ムリ！！

どうしよう。なんか良い策ないかな？

…ああ、もう！なんでこんなことになるの！？…元はといえば自分

の不注意のせいなんだけど。
でも、そんなこと今更言ってもしょうがない。

マジで明日どうしよう

う！！！！！！

…これが先輩との出会いだった。

先輩との出会い（後書き）

こんな感じです（笑）

いやー、亜緒は口が悪いですねー（、、＊）（ケラケラ

二度目の出会い（前書き）

第4話です！

楽しんでいただけたら幸いです（ ・ ・ ）

二度目の出会い

先輩と出会った次の日。

うちはいつものように朝シャンをした。浴び終わって、朝ごはんを食べながら悩んでいた。

学校に行くか行かないか。

行きたくないといえは行きたくない。でも休むと授業に追いつけなくなる。

自分の名誉を優先させるか、授業を優先させるか。

…うーん。どうしよう。悩む……

やっぱり、学校に行くしかないか。いくらバラされてて周りと気まぐずくても、授業が受けられないわけじゃないし。それに将来、職に就くためには学歴あるのみ。

よし、学校行こう！

家を出る前に、自分の両手でほつたをパンツと叩き、気合を入れて出発した。

学校に着き、教室に入る。そして、バラされていないかとドキドキしながら中にいる人に

「おはよう。」

と声を声をかけると

「あ、おはよー」

「おはよー」

と普段と変わらない陽気な挨拶が返ってきた。

…あれ？も、もしかして、バラされてない？……だよね？

普通バレてたら、詰め寄って来たり、もしくは無視されるとか、コソコソされるとか。

あるよね？それが無いってことは、大丈夫なの？

などと考えていると、突然後頭部を誰かにベシッとはたかれた。

「いたっ」

「突っ立てんのが悪い。何してんの？邪魔だよ」

犯人は、真だった。それでもまだ動かないうちの背中を、強引に押し込み出した。

「わ、わわっ」

「まったく。邪魔だっって言ってんのに」

そして真はくすくすと笑い出した。

うちは真に押されたまま、自分の席まで来てしまった。それが何だか恥ずかしくて、俯いたまま自分の席に座った。

「何かあったのか？」

「え？」

真は唐突にそう聞いてきた。

コイツは何でもおみとおしなのか？

でも昨日のことは言っていないのか……。わかんないや。
まあ、言わないことにしよう。

「別に何にもないよ。」

「ホントか？」

真はしかめっ面をして聞いてきたから、うちは笑顔で答えた。

「本当だよ。」

すると、納得がいけないような顔をしながらも

「ふーん。」

と言った。

別にそんな顔しなくても。

てか、何でうちのことなんか気にすんのかな。わけわからん。
どうでもいいか。とにかく、バレないようにしよう。

次の授業は移動教室だった。うちはそのことを忘れていて、のんびりとトイレに行っていた。

それから教室に戻ると、誰もいなかった。ものすごく焦った。そして急いで準備をし、廊下を走っていると、

ドンッ

と誰かにぶつかってしまった。

「すみません！」

うちはぶつかった拍子に落ちてしまった教科書などを拾いながら言う、

「いや、こっちこそごめん！ボーツとしてて…」

とその人が言い、一緒に拾ってくれた。

「はい、どうぞ。……………！！」

「あ、ありがとうございます、……………！！」

拾ってもらったノートを受け取るうとして、顔を上げて見たものは……………一ノ瀬先輩だった。

や、ヤバイ！これはヤバイ！！…これは、あれだ。逃げるしかない。うん。そうだ。

「あ、あの、急いでるので…！」

「えっ？ちよつと！！」

「すみません！！」

そしてうちは走り去った。走りながらうちはこう思った。

あゝマジで今のはヤバイ。ヤバイ。でもしょうがないな。うん。しょうがない。

そうそう。知らない。知らないことにしよう。そうしよう！

これがうちと先輩の二度目の出会い。

二度目の出会い（後書き）

どうでしたでしょうか。

これからもがんばりたいと思います。

先輩とのイヤな約束（前書き）

少し長め？です。

是非読んでください（＊・・＊）＊―――）

先輩とのイヤな約束

あれからうちはブルーな気持ちでいっぱいだった。
授業の内容も何も入ってこない。

はあ。どうしよう。また会ったりしたら最悪なんだけど。
チョーサイアク。会わないことを願うしかない。
いるかわかんないけど、いや、多分いないと思う神様。
お願いします。うちと先輩を会わせないでください！！そして頭の
中で手を合わせた。

「…さん。館華さん。聞いてる？おーい」

全然気づかなかったが、誰かに呼ばれていたみたいだ。

「…えっ？あ、ごめん！聞いてなかった。…もう一回言ってくれる
？」

「いいけど。どうしたの？いつも真面目に授業受けてるのに」

「そ、そうかな。」

「うん。まあいいや。あのね、ここを……」

「うん。うん。……」

ダメだ。昨日からあの先輩のこと考えて何も出来てない。

一回忘れよう。そうしないとまたない。うちの頭がタイヤのように
パンクしてしまう。

それからうちは授業に超集中した。

授業が終わり、昼休みに入った。
うちは疲れきってしまい、廊下をガラガラと歩いた。

はあ。

…なんかため息ついてばかりじゃね？うち。こんなんじゃ幸せ逃げてくよ。

待って、幸せさ～～ん！！私を不幸にしないでえ～～！！

…ハハハ。キャラ崩壊してきちゃった。テヘ（ノ、）

…うわ。キモチワルツ。つついカタコトになっちゃったよ。外人かつ。

…自分で自分をツッコんじやったよ。（。m ;）アレマツ！

.....

ホントにおかしくなってきた…。ヤバイ。うちここまでどんだけボケてきた？

もう可哀想な人じゃね？どうしよう。

…あれもこれもあのノ瀬先輩のせいだ。（まあ、あれもこれもつて程じゃないと思うけど）

なんて思っていると、

「あ！やっと見つけた！探したんだよ。」

「.....」

と前から何かを言いながら近づいて来る人が見えた。

何言ってるんのあの人。独り言？カワイソー。

「おーい！」

そう言ってる人は手を振った。

…誰だよ。早く行ってやれよ。あの人可哀想な人になってるから。

と思っただけを見てみると…誰もいなかった。

あの人。もしかして…うち？

…ま、まさかあー。うちなわけ…ってあれ誰？

目を一生懸命凝らしてみると、そこにいたのは……一ノ瀬先輩だった。

あ。一ノ瀬先輩じゃん。遠目で見てもカッコイイんだなあ、あの人
は。

…ん？イチノセセンパイ？

え？い、い、い、一ノ瀬先輩！？

こつちに向かって来る！？え、え………！？来ないでえ………
く………！！

そんなうちの思いとは裏腹に、先輩は笑顔で小走りをして来た。

ヤバイ！やっぱここは逃げるべき？いや、そんな悩んでいる時間
はない！

時間は刻々と迫っているんだぞ！亜緒、何がなんでも逃げる！

そして全速力で走った。

やっぱり神様ついていなかったんだ。そっかそっか。

神様がいないなら、何ならいるのかな？ 仏様？ あ、そうかも。

仏様~~~~！ お願い、助けてえ~~~~！！

後ろが気になり、チラッと振り向くと、

「待つてよ！ なんで逃げるの！？ おーーーーい…」

うわー！ 追って来てるよ！

え？ てか速っ。何あの速さ。追いつかれるう~~~~！！

「どこ行くの？ あ！ そっちは…」

は？ 何言ってるの、あの人。そっちに何があんのよ。

後ろを向いていたうちはその言葉で前を向いた。

するとそこにあっただのは…どっしりと構えた大きな行き止まりの壁だった。

う、うわあ~~~~！ ぶつかる~~~~！！…

うちは急いで自分の足に急ブレーキをかけたが…遅かった。必死の急ブレーキも叶わず、うちは目の前の壁に、

ドンッ！！

と鈍い音を立てて勢い良く頭をぶつけた。

「いたたた……」

そのままうちは後ろに転がり、教科書やら何やらをぶちまけて頭をさすった。

マジで痛い。今世紀最大の痛さじゃないだろうか。絶対たんこぶ出来るよ。

恥ずかしすぎるよ、ソレ。しかもこんなとこシップ貼れないし。貼ってたらそれまた恥ずいし。

「…大丈夫？うわぁ、痛そ。」

「……………」

…忘れてた。完全に忘れてた。この人の存在。

うちはしゃがんだ先輩を呆然と見た。

何この人。いつ見てもカツコイイじゃん。マジムカつく。

「そんなに後ろ見て走るからだよ。…てか、なんで逃げるの？」

うちはまだブーツと先輩を見ていた。

うち、何も言っていないよね？一言も発していないよね？

それなのに喋るんだ。疑問まで投げかけちゃうんだ。ある意味すごいね。

「…おい。聞してる？おい。」

あ。もしかして頭痛い？保健室行く？」

そう言つて先輩が立ち上がった。

今だ！逃げる！

と思い、教科書などを急いで集め取り、全力疾走で逃げると…。

「うわ！ちよつと！」

と言つて先輩が追いかけて来た。

もー来ないでよ！！しつこい！このまま逃げ去りたい！！

そんな思いも虚しく消え去つてしまった。

走つてから約5秒後に追いつかれ、腕を掴まれてしまった。

その力はとても強く、痛い程がっちりと掴まれた。

最初は少し痛いと思うだけだったが、だんだんともものすごく痛くなつてきた。

…加減というものを知らないのか、この人は。

うちは一応女の子だよ？か弱い女の子だよ？例えば性格が男っぽくても。

我慢出来ずに、

「い、いたい…」

と言つと、

「え？…あーごめん！！少し強かったよね？ごめん…」

と言い、うちの腕を掴んでいた手をパツと離れた。

少しじゃねーよ、少しじゃ。しかも痛すぎて声出すの辛かったよ？
そっいうの、ちよっとは分かっててもよくね？マジ何なの？

「で、話戻したいんだけど、」

と言った所で、丁度

キンコンカーンコン…

とチャイムが鳴った。

うわー最悪。お昼食べてないんだけど。授業中お腹なったらどうすんの。

「あ。チャイム、鳴っちゃったね。んーじゃあ、話の続きは放課後で。じゃあね。」

「…え？あ、あの！…」

先輩は最後に「また後でね。」と付け足して去って行った。

…………。え？

また会わなきゃいけないの？嫌だよ、会いたくないよ？
てか話とか大方察しがつくよ？どうせこの前の放課後の話でしょ。

『なんでバスケやってたの？』

とかでしょ。そんな話してやるものかつ。

放課後なんて先輩と会いません！！ハッ。バーカ。ちょっとカッコ
イイからって何でも出来ると思っなよ。

先輩とのイヤな約束（後書き）

どうでしたか？

感想など、お聞かせください！！

先輩とのメアド交換（前書き）

結構久しぶりですね（、、；）

先輩とのメアド交換

…ついに放課後を迎えてしまった。

まあ、ここは迷いなく帰るでしょ。それにどこで待ってればいいかわかんないし。

さて、帰ろ。みんないなくなっちゃったし。

ふー。今日も疲れたなあ。っ！！

「さて、話をしようか。館華さん？」

うおーい！！

目！目がなんか怖いよ！？そんな、2・3回会っただけの人に怖い目する？

いや、怖い！！逃げるに逃げられないじゃんか！

そうしている間にも、先輩はうちに近づいて来ていた。

「ま、座って話そう。」

「は、はい……」

ちよつと、威圧感がすごすぎて語尾ちっちゃくなっちゃった。

この人こんな怖い顔するんだ。ある意味二重人格？

そして近くの席に座った。

「さ、いきなりだけど本題に入らせてもらっよ。」

「は、はあ……」

なんて答えようかな。『たまたまボールが転がってきたから』とでも言おうかな。

「館華さん。…バスケ、好き？」

「……え？」

「え？」

予想外の質問に、思わず素っ頓狂な声が出てしまった。

それ聞いてどうすんの？『好きです』って言って『そっか』だけじゃない？

…いや。質問も質問だったから次の答えも答えか？それなら答えてみる価値あるかも。

「あ、好き？です。はい」

「そっか」

…あれ？今度は予想通りの答えだ。なーんだ。おもしろくないで、何なのよ。好きだからなんだっていうんだ。まったく。

「じゃあ、何でバスケやんないの？」

「……………」

あつて間もなくてうちの本性だって知らない人にそう簡単に『才能ないからです』なんて言えるわけない。それにこんなこと他人に言う気はサラサラない。

「ん？何でなの？」

目の威圧感の割には聞き方は優しい。変な人だ。

「いや、その。…べ、勉強に集中したいからです！」
「…ふーん。」

何その間。完全完璧疑ってるわー。でも、それも理由の一つだもん。
嘘は言ってるないもん！

「ま、いいや。ホントのこと言う気はないみたいだから。」
「……………」

お前はホントのこと知ってるのかよ。

「俺、これでも一応リサーチはしてきてるんだよ？」
「リサーチ？」

なんじゃそりゃ。どうせ安っぽい情報でしょ。はーうざいうざい。

「まず名前から。館華亜緒。9月9日生まれのおとめ座。本当の性格を隠して学校生活を送っている。家庭は少し貧しい。極度の面倒臭がり屋。だけど困ってる人とかなんかに優しい。小・中学とバスケをやっていた。けど高校ではやっていない。頭は良い。…間違ってる所ある？あるなら訂正するけど。」
「……………」

驚くくらい当たっている。ただ、優しくないし頭良くないし。
…ん？待てよ。うちが猫かぶってるって知ってる？しかもリサーチした！？

え！！誰？その人誰！？

そしてうちは慌て始めた。

「だ、だ、誰情報ですかっ!？」
「……プッ!！」

うちは勢い良く立ち上がって聞いた。すると先輩は吹き出した。

ち、ちょっといきなり過ぎたかな？まず、座ろうかな。
ふー。取り乱しちゃった。ここは切り替えて。

「あの、誰情報ですか？」

「切り替え速いね。館華さんの中学時代の先輩だよ。渡部先輩。」
わたべ

渡部？わたべ、ワタベ、渡部……あゝあ！あの人ね。確かにあの人と仲良かったな。部活で一緒だったし。でもあの人、口軽いな。

……って呑気なこと考えてる場合じゃなくて。

「そのこと、一ノ瀬先輩以外の誰かに言ってみました？」

「んーと……言っていないと思う。思い出すのにも時間掛かってたみたいだから。」

「そ、そうですね。……ならいいんだけど」

まあ、なんとなく信用出来るか。思い出すのに時間掛かったっていうし。

てか、話それだけかな。帰りたいんだけど。終わったよね。

「じゃあ、帰ります。それでは」

そう言っただけだと、ガシッと腕を掴まれた。

「あ、まだ聞きたいことありました？」

「……んーん。」

先輩はそう言って首を横に振った。

「え？じゃあ……」

この手の意味は何？どうしてうちを引き止めるの？……訳わかんない。

「……興味湧いた。」

「へ？」

「メアド、交換しよう。」

メアド交換？……メアド交換！？なぜに！？え？え？
てか、興味湧いたって…何？え、どうしたらいいの？

「俺と交換するの……イヤ？」

「え？イヤっていうか…。その…」

ケータイなんて滅多に使わないから…。昔の友達のとかが全部消しちやったし。親とかお姉ちゃんからも滅多にメールとか来ないし。

「イヤならイヤって言っていんだよ？」

「イヤとかそういうことじゃなくて…」

「？」

イヤじゃないんだけど……うちなんかが交換していいの？

ほら、うちより可愛くて面白い子なんていっぱいいるじゃん？そんなの人気者の先輩ならすぐ見つかると思うし。その子達だって先輩

とメールしたいって思ってるだろうし。

それに、別にうち先輩のこと好きってわけじゃないから、好きって言うてくれる子とかと交換したほうがいいじゃん。
そっいう意味で、悪いんじゃないかなって…

「うちで…いいんですか？」

「?……フツ。ますます興味が湧いてきたよ。」

そして先輩は制服のポケットからケータイを出した。その間もうちの腕を掴んでいた。
それからメアドを交換している最中、

「あの、逃げないんで離してもらえませんか？」

と言うと、

「ん? ヤダ。」

と返ってきた。

え? 何それ。逃げないって言うてんじゃない。うわ。しかもだんだん力強くなってきたよ。

いー、痛い痛い。何? この人無意識でやってんの? 昼休みもそうだったし。

「よし、終わった。じゃあ今日はそろそろ帰ろつか。」

「……………」

「ん? どうしたの? 顔、歪んでるよ。」

…誰のせいだと思ってんだよ。ホント、「冗談抜きでマジ痛い。今度

こそ声が出ない。

「っ……」

「ん？…あ、ああ！ごめん！力入れすぎた！痛かったよね？」

「だ、大丈夫です。」

「ごめん。あんまりにも細かったから…」

「……………」

細いからって力入れんなよ。ちょー痛いわー、マジで。

って、うちの腕細くないし。そりゃあ、男に比べたら細いけど。普通でしょ。

ま、いいや。帰る帰る。

「あの、今度こそ帰ります。それでは。」

「うん。じゃあ、また明日。」

「…明日…」

明日、また会うの？…会ってくれるの？

って、何嬉しがってんの、うち！そんな、またなんて会いたくもないわ！

帰る帰る！そう、帰る！！

先輩とのメアド交換（後書き）

次も頑張ります（＃＾・＾＃）

私の先輩のメール（前書き）

ものすごく久しぶりになってしまいました！！
すいません（・・；A）アセアセ…

今日から新学期が始まり、気を引き締めてまたちよくちよく更新していききたいと思います（*´、*）

私の先輩のメール

…はあ。

なんか今日はまだ朝なのに溜息ばかり出るな……はあ。
ほら、言ってるそばから溜息だよ……はあ。

あ~~~~~!!!!!!

昨日はなんていう失態をさらしてしまったんだ!!

まったく。自分でも何考えてるかわかりやあしない。

しかも『また明日』とか言われて喜んじやったし。……はあ。

てか、まさかうちが高校入ってからメアド交換するとは思わなかったな。

…うちでいいのかって聞いちゃったし。

で、でも!そう思ったのは事実だし、あん時頭おかしくなってたのもあるけど、少なくとも“うち”自身が思ったわけだし…。

つて、あ~~~~~!!

またいろいろ考えちゃってる~~~~~!!

もう、やめやめ!これ考えるの。

学校行こ!学校!

「おはよう」

さっきまでの思いを心の奥深くくくにしまい込んで、猫かぶりモードON！に切り替えて教室に入り、挨拶をした。

「おはよう」

「おう、おはよ」

自分の席の近くに行き、うちの後ろの席に座っている真に挨拶をした。

「なんか今日は遅いな。いつも俺より先に来てるくせに」

「え？そ、そうかな？あ、あれだよ！今日は真が早かったんじゃない？」

「そうか？まあ、いいけど。」

「そうだよそうだよ。気にしないで」

アハハハと愛想笑いをして流した。

実は凶星だった。

朝、いろんなことを考えすぎて、用意が遅れてしまった。そのせいで結構ギリギリだった。

でもまあ気にすることでもないからいいでしょ。

そして一日が始まった。

ある授業の時のことだった。

いきなりうちのケータイが鳴った。

鳴ったというか、マナーモードにしてたから制服のポケットの中で震えた。

今までそんな経験がなかったから、最初はどうしたらいいか戸惑った。

でも、着信の短さからメールだと気づき、こっそりとケータイを開いてみた。

From：一ノ瀬先輩

今日俺の部活見に来て（^^）

あ、ちなみにバスケ部ね（笑）

返信ちょうだいね^^

とかいてあった。

…いきなりかよ。しかも今授業中だぞ。何考えてんだこの人。

でも返信って……キツイでしょうよ。

今の授業、運悪く小テスト中だし。先生ウロウロしてるし。

うん。……

無理だ。うん。無理。

あとにしよう。別にすぐにつてかいてあるわけじゃないし。

そしてケータイを閉じてまたこっそりと制服のポケットにしまった。

誰にも見られてないよね。

てか、見れるわけがない。みんなテストに夢中だし。うんうん、セーフ。

のはずだったが、実はアウトだった。

それがこれから問題になるとは知らず。

私の先輩のメール（後書き）

これからもよろしく願いします（＊・・＊）
———（ ）ペコ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0709z/>

私と先輩と、バスケットと恋。

2012年1月10日20時58分発行